



同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第6期展
「同志社の ORIGIN
—ALL DOSHISHA からのサポーター—」



〔開催概要〕

同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第6期展

「同志社の ORIGIN-ALL DOSHISHA からのサポーター」

会期：2017年9月15日～2018年3月中旬

会場：同志社京田辺会堂光館ラウンジ（同志社大学京田辺キャンパス）

主催：同志社大学キリスト教文化センター

協力：同志社大学同志社社史資料センター

表紙資料：油彩画「ラットランド演説」1960年代

ごあいさつ

同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）で1 Semesterごとに行っている展示は、学生の在学期間である4年（8 Semester）を1タームとした企画で、今回で6期目となりました。「同志社大学のキリスト教」から始まり、「新島襄と同志社」、「新島襄と自然科学」、「新島襄の Go Global—海を越えて—」、「同志社の GLOCAL—京田辺とのあゆみ—」というように、これまでは主として同志社のバックボーンをテーマとしてきましたが、今回のテーマは、いよいよ同志社大学の設立に直接焦点を当てた、「同志社の ORIGIN—ALL DOSHISHA からのサポート—」です。

同志社大学設立運動は、1882年（明治15）に、新島襄が奈良県の土倉庄三郎から、法学部を設立することを条件に、約5,000円の寄付の約束を取り付けたことから始まりました。以来、新島は、永眠する1890年（明治23）までの約8年間、この運動に身を挺しました。寄付とは、寄付対象への期待を具体化した行為であり、寄付を受けた側には、その期待に応える責任があります。未だ寄付という習慣が根付いていない日本において、寄付の意義を説き、その責務として同志社大学が果たし得る社会的役割を説明することが同志社大学設立運動であったのです。その集大成が、「同志社大学設立の旨意」です。みなさんには今回の展示をつうじて、同志社大学が国内外の多くの支援者によって設立されたこと、そして新島がその期待に応えるべく構想した同志社大学に思いをはせていただきたいと思います。

同志社大学は、今学期から、創立150周年にむけた取り組みとして、「同志社大学 2025 ALL DOSHISHA 募金」を開始します。「ALL DOSHISHA」とは、学生、教職員だけではなく、同じキャンパスで学んだ校友、保護者等も含め、同志社大学に期待を寄せるすべての方々を指します。まさに現代版同志社大学設立運動と言えるでしょう。1874年（明治7）、日本がまだほとんど知られていなかった頃、アメリカ合衆国東北部のヴァーモント州にあるグレイス教会での、新島の「母国にキリスト教主義の学校を作りたい」との涙ながらの訴えに心動かされた農夫が差し出した、帰りの汽車賃2ドルを含むキリスト教徒の人々の善意から同志社の歴史は始まったと言えます。一人の勇気、一人の一步から始まった、大きな未来への潮流を担う一員として、みなさんも「躍動する同志社大学」を目指して漕ぎ出してほしいと願っています。

同志社大学キリスト教文化センター所長
横井 和彦
2017年9月

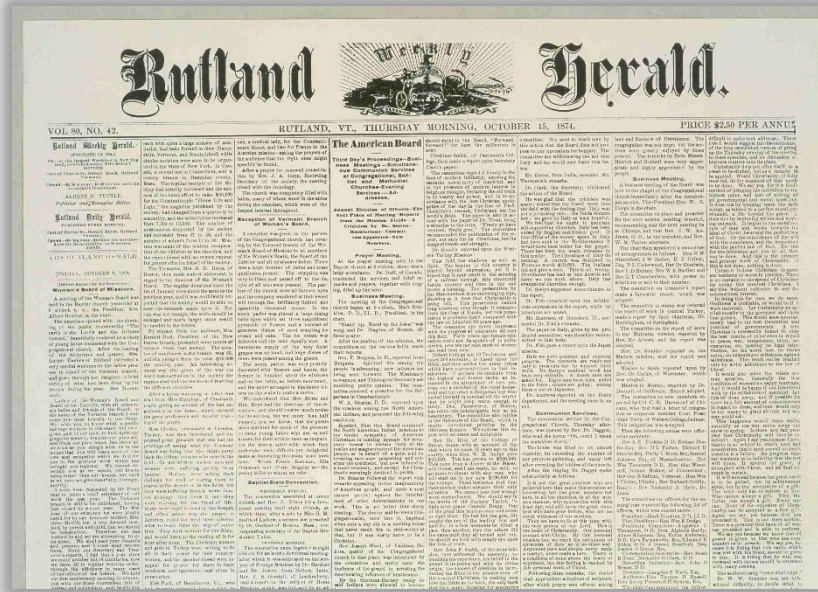
目次

ごあいさつ.....	1
展示テーマ「新島襄への期待」.....	3
展示テーマ「新島襄の同志社大学設立運動」.....	12
資料リスト・使用写真リスト.....	22

展示テーマ

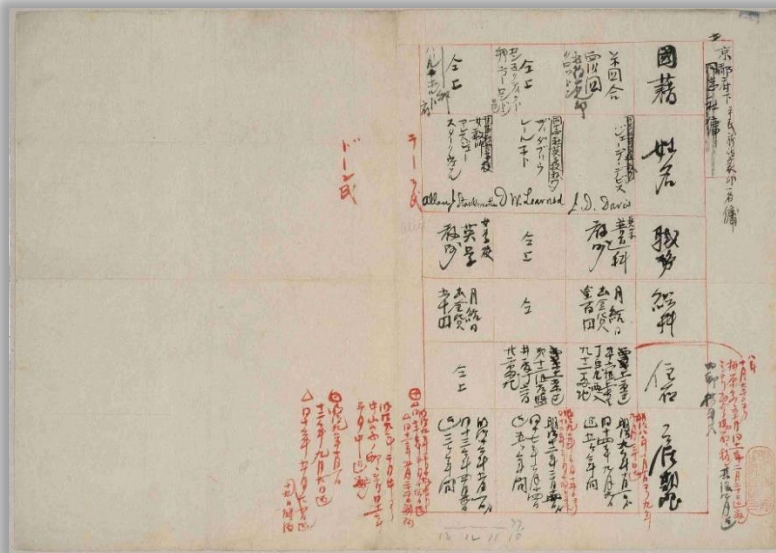
「新島襄への期待」

同志社の歴史は、1875年（明治8）の同志社英学校の開校から始まります。創設期の英学校は、アメリカの海外伝道会社であるアメリカン・ボード（American Board of Commissioners for Foreign Missions）の援助を受けていました。その援助は海外からの寄付です。つまり、英学校開校はボードを通じて寄せられた海外の篤志家からの期待の対象でもありました。ここでは、こうした期待を受け、新島が運営した同志社という学校の実態を示す資料を展示します。



Rutland Weekly Herald, vol.80, No.2 (複製) 1874年10月15日発行 1枚 60.5×45.8cm

この新聞は、アメリカ合衆国ヴァーモント州にあるラットランドで発行された地元紙（1874年10月15日発行）です。同地で開催されたアメリカン・ボード第65回年次大会での新島襄に関する記事が掲載されています。新島はこの大会の最終日（同年10月9日）に日本に向かう宣教師の一人として挨拶の壇上に立ち、そこで日本にキリスト教主義の学校を設立したいと聴衆に訴えかけたと言われます。新島の呼びかけに応じて約束された募金額は、約5,000ドルであったと言われます。



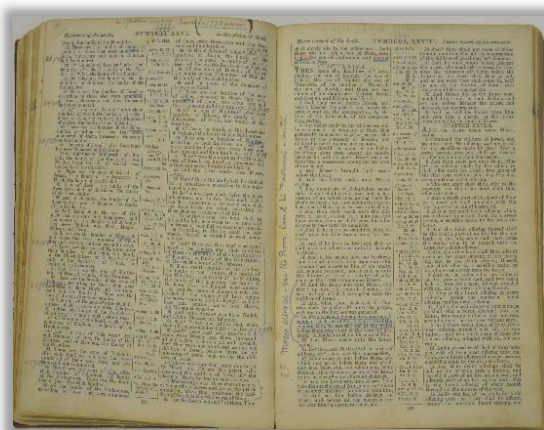
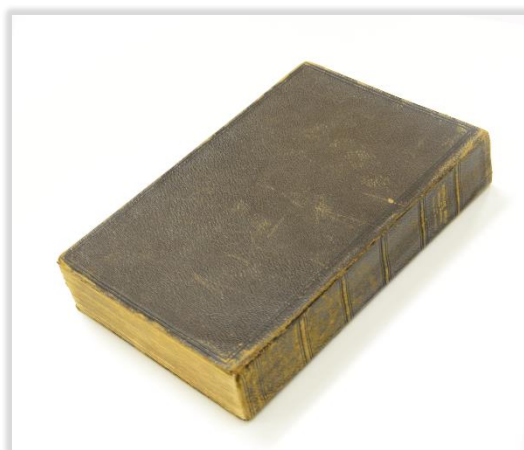
同志社外国人教師一覽 (複製) 明治時代 1枚 28×39.3cm

同志社に在籍した一部の宣教師の個人情報が集められた一覧表です。1870年代後半に作成されたと考えられます。英学校及び女学校の開校時には日本人教員も在籍していましたが、アメリカン・ボードが派遣した外国人宣教師も教師として多数在籍していました。とりわけ男性宣教師は、当時のアメリカ社会のトップエリートで、彼らが在籍していたことが同志社の学問性の高さをうかがわせます。また、宣教師の存在が、ボードから同志社へのマンパワーの提供を意味しています。



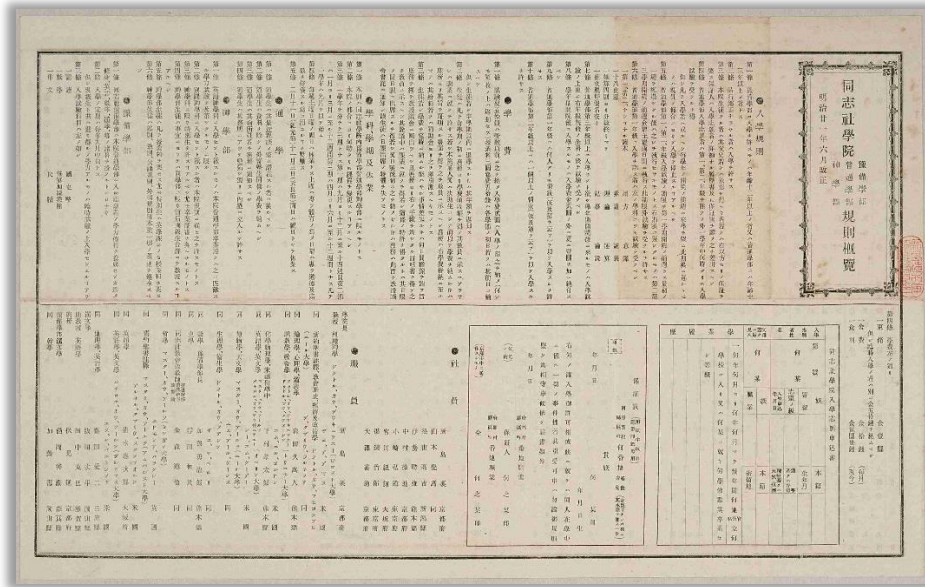
自責の杖 (複製) 明治時代 3片 最大60cm

打掌で折れたとされる新島の杖です。1880年(明治13)4月、当時2年生の上級組と下級組の合併決議を発端とする学内ストライキが発生し、学内が混乱しました。新島は同月13日の朝礼の席で、一連の騒動は学生や幹事の責任ではなく、校長である自らの責任として自らの手を杖で打ちつけました。この衝撃的な事件を物語る杖は、新島のキリスト教信仰に係わる贖罪感、そして教育観を伝える象徴として、これまで受け継がれています。



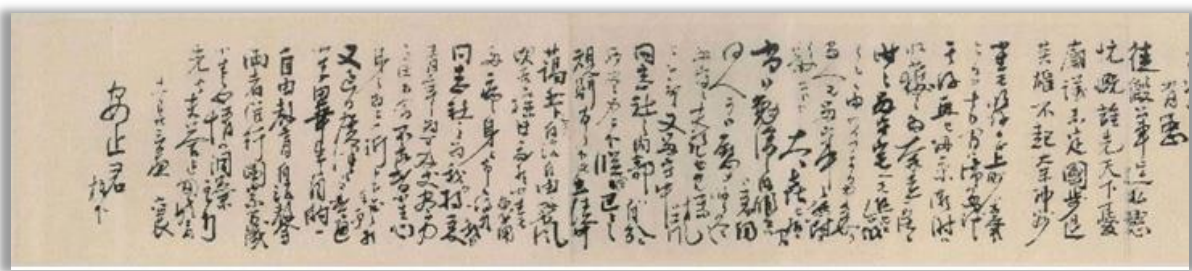
新島襄旧蔵聖書 (複製) 年不詳 1冊 21×14cm

新島がアメリカに到着した翌年に、ハーディーが後見人を務めていたJ.M.シアーズ (Joshua Montgomery Sears, 1854~1905) より贈られた英訳聖書です。手書きのメモや印は、新島のキリスト教に対する知的好奇心や信仰の深化過程を示しています。同志社は新島の在世中から自然科学や社会科学の専門学校を次々と開校させますが、その大前提としてキリスト教を徳育の基本としていました。この聖書は、同志社のキリスト教主義の歴史と重要性を示す資料のひとつです。



同志社学院規則概覽 (複製) 1888年 1枚 32.7×52.3cm

1888年(明治21)6月時点での同志社内の学校概要を示す資料です。この年、同志社英学校が改組し、予備学部、普通学部、神学部を備えた同志社学院となります。学生数は683人(神学部72人、普通学部405人、予備学部206人、すべて年度末在籍者数)でした。さらに、翌年1889年(明治22)に3つの学部はすべて単独の学校となります。この3校に、同志社女学校、京都看病婦学校、そして同志社病院を加えた5校、1病院が当時の同志社の主要教育施設でした。



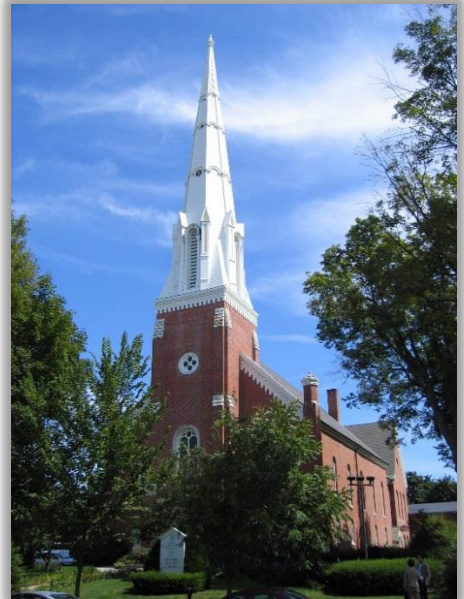
横田安止宛新島襄書簡 (複製) 1889年11月23日付 1通 18×169cm

新島が1889年(明治22)11月23日、療養先の東京から同志社普通学校5年生の横田安止に送った手紙です。新島は憲法が公布され、国会開設を間近に控えた国家がどうあるべきかを手紙で語っています。また、この文中に、「良心」を表象する一文「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ望テ止マサルナリ」があります。新島の教育理念の象徴であるこの文言は、現在石碑に刻まれ「良心碑」となり、同志社諸学校や、新島の母校であるアメリカのフィリップス・アカデミーなどに建立されています。

<ラットランド演説>



油彩画「ラットランド演説」



グレイス教会

アメリカン・ボードの準宣教師として日本に派遣されることになった新島は、アメリカのヴァーモント州ラットランドのグレイス教会で開催されたボードの第65回年次総会最終日に挨拶のため登壇しました。この時初めて、新島は日本でのキリスト教主義学校設立の志を吐露します。その志に感銘を受けた聴衆から、その場で計約5,000ドルの寄付の約束を得ました。この寄付は、後に同志社の開校・運営に活用されたと言われます。

<開校当初の今出川キャンパス>



今出川校地最初の専用校舎 第一寮と第二寮



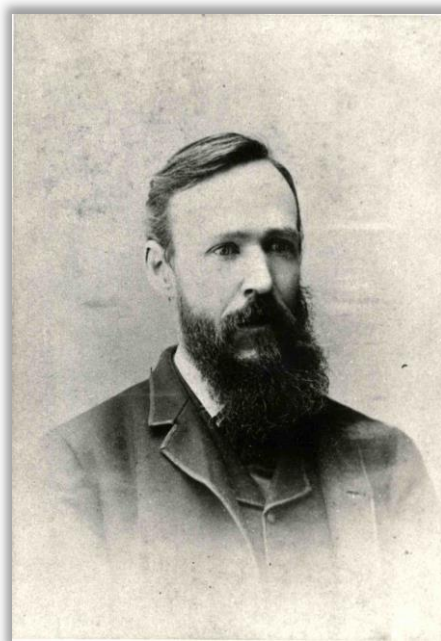
薩摩藩邸跡碑

同志社英学校最初の専用校舎は、木造の教室兼寮2棟と食堂で、在学生の多くは寄宿舎生でした。寺町通（現在の新島旧邸のある場所）の仮校舎から、今出川への移転は、開校翌年の1876（明治9）年9月でした。この土地は、新島襄が1875（明治8）年6月に、山本覚馬の力添えで購入した薩摩藩邸跡です。キリスト教禁教の高札撤去後も、キリスト教に対する反発が残る時代に、内裏（現在の京都御苑）の真北、京都五山第二位の相国寺の門前に校地を構えることになりました。

<デイヴィスとラーネッド>



J. D. デイヴィス



D. W. ラーネッド

J. D. デイヴィスと D. W. ラーネッドは、ともに同志社の発展に生涯の多くを捧げたアメリカン・ボードの宣教師です。デイヴィスは、設立時から同志社の教育と運営の両面に尽力し、ラーネッドも多種多様な講義を受け持ち、日本で最初に経済学の講義を行ったことで知られています。同志社の振興に大きく貢献した二人の名前は、京田辺校地の「デイヴィス記念館」と「ラーネッド記念図書館」に冠されています。

<同志社礼拝堂>



竣工当時の同志社礼拝堂



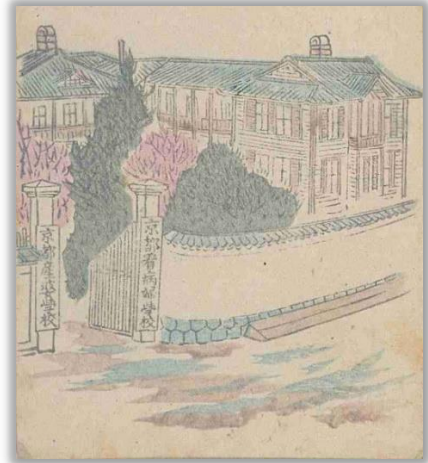
竣工当時の礼拝堂内部

礼拝堂が完成する半年前の1885（明治18）年12月18日、同志社礼拝堂定礎式が挙行されました。この時新島は「教育ノ基本ハ宗教ニアリ」、「此礼拝堂ハ我同志社ノ基礎トナリ又タ精神トナル者」と述べ、礼拝堂が同志社の象徴的存在であることを示しました。現在も礼拝堂は宗教教育の中心的存在を担っています。

<同志社病院・京都看病婦学校>



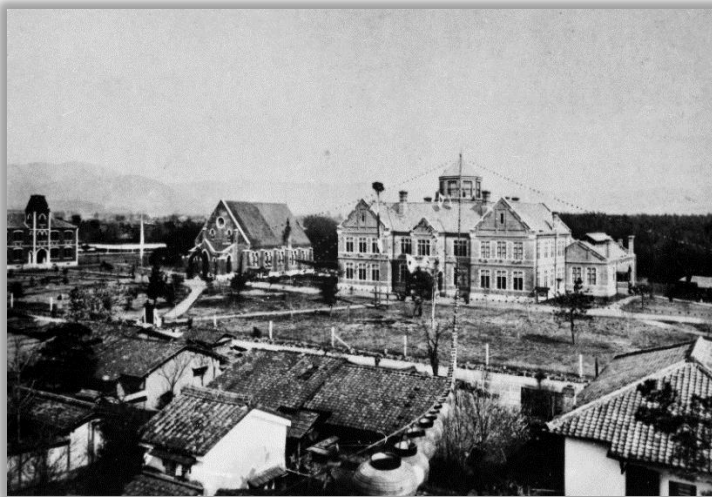
京都看病婦学校校舎



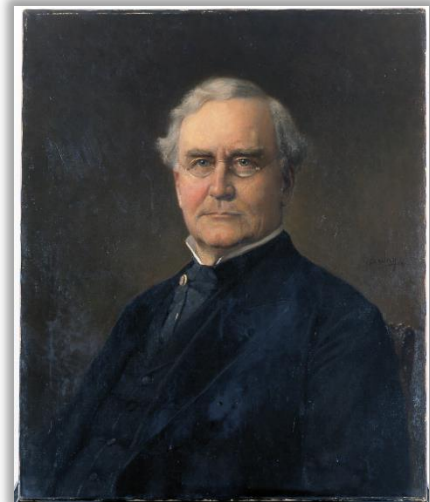
封筒(部分) 京都看病婦学校絵入

1886年(明治19)開院・開校。かつて現在のKBS京都の場所(上京区烏丸上長者町)にありました。新島は当初医学校の開設を目指し、協力者であるJ. C. ベリーとともに教派を越えて資金集めに奔走していました。しかし、諸事情から開校資金の目処が立たず、最終的には病院の開院と看病婦学校の開校に落ち着きました。特に、看病婦学校は同志社開校から11年目にして開校した、同志社初の自然科学系専門教育機関でした。

<J. N. ハリスとハリス理化学校>



竣工時のハリス理化学館



ナポレオン・サロニー作「J. N. ハリス肖像画」

J. N. ハリスはアメリカ・コネティカット州セイレム生まれ、同州ニュー・ロンドンにて20歳から商業に携わって成功し、ハリス商会を設立します。後には、本業とともに銀行の頭取や製薬会社の社長をも兼務するなど、財界で成功した人物でした。また、教育・宗教関係への多額の寄付者としても知られていました。ハリスは新島の理化学教育に対する熱意に賛同し、同志社へ10万ドルを寄付します。その一部がハリス理化学館建設に充てられ、同時にハリス理化学校が開校しました。ただし、ハリス理化学校は財政難のため、7年で閉校になります。同志社における理化学教育の再興は、1944年(昭和19)同志社工業専門学校開校の時でした。現在のハリス理化学研究所はハリス理化学校の伝統の上に立ち、革新的な研究を続け、学生の教育・研究の活性化を促進しています。

<クラーク神学館>



竣工当時のクラーク神学館

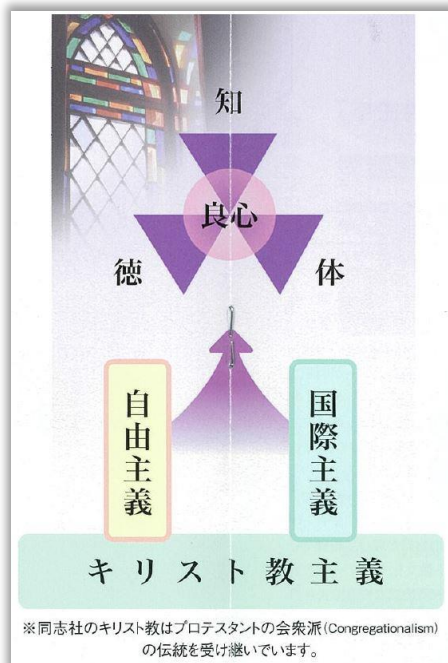
Byron Stone-Clarke Memorial Hall



玄関欄間に刻まれたクラーク神学館の正式名称

新島の永眠後、彼を記念する神学館を建築しようと、校友による募金活動が行われました。しかし、なかなか結果が伴いません。そのような折に、アメリカン・ボードを通じて B. W. クラーク夫妻から、亡くなった子息 B. S. クラークの名を館名に冠するという条件で、10,000 ドルの寄付を受けました。その寄付を元手に、1894 年（明治 27）、尖塔が特徴的な煉瓦の建物が竣工しました。竣工当時は神学教育の中心でしたが、1963 年（昭和 38）の現在の神学館完成後、クラーク記念館と改名されました。

<同志社の精神的な基底をなすキリスト教主義>



キリスト教主義と教育理念の関係を表す相関図

同志社の支柱である自由主義と国際主義を基底で支えるものは、キリスト教主義です。これは同志社独自の校風を形成する最大の要素となっています。新島は、学生一人ひとりを、神がつくられた「人格」として最大限に尊重しました。以来、「人ひとりは大切なり」が大事な校風として守られてきました。その結果、聖書にあるように、隣人を尊重し、他者に奉仕する「地の塩、世の光」とも言うべき個性豊かな多くの卒業生を、いろいろな分野へ開拓者として送りこんできました。そうした営みは、これからも永続します。

<チャペル・アワー (キリスト教文化センター主催) >



京田辺校地 言館(KOTOBA-KAN)礼拝堂

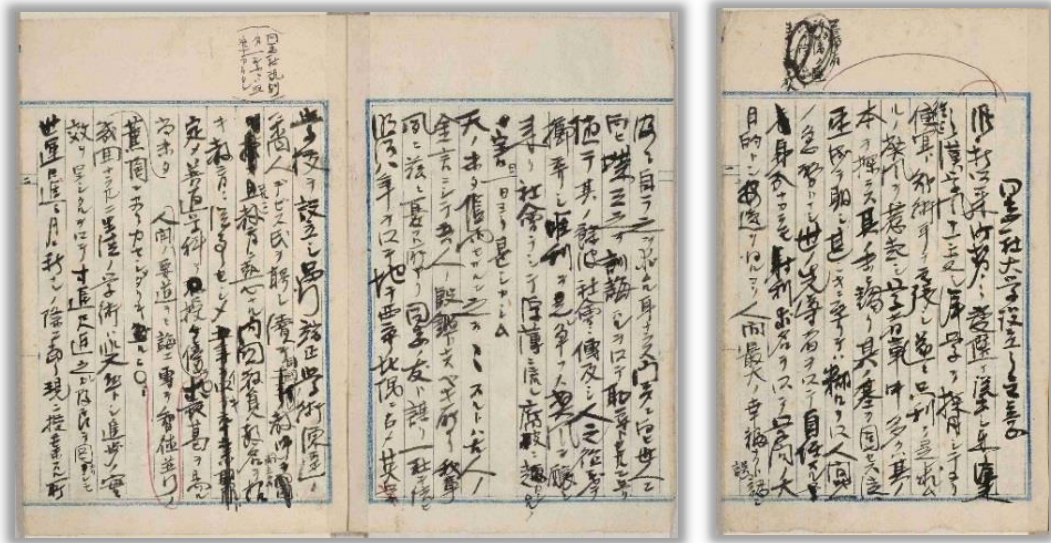
開講期間中、両校地の礼拝堂においてそれぞれ週 3 回行われており、現代に生きる人間の諸問題をめぐって、本学教職員や教会の牧師、そして様々な分野で活躍されている方々に奨励していただいています。チャペル・アワーは礼拝形式であり、オルガンの奏楽で始まり、讃美歌斉唱、聖書朗読、祈祷、奨励者によるメッセージ、祝福などが行われています。クリスチャンでない方々にも親しみが持てるように、日々の暮らしにまつわる話などを交えながら、イエス・キリストや聖書のことばをわかりやすく語っていただけます。また、教職員の場合には、同志社におけるご自身の学びや体験をお話されることもあります。学生の皆さんだけでなく、地域の方々も参加されていますので、ぜひ気軽にお越し下さい。

	京田辺校地	今出川校地
火曜日	ランチタイム (12 : 35~13 : 00)	17 : 30~18 : 10
水曜日	15 : 00~15 : 45	10 : 45~11 : 30
金曜日	ランチタイム (12 : 35~13 : 00)	ランチタイム (12 : 35~13 : 00)

展示テーマ

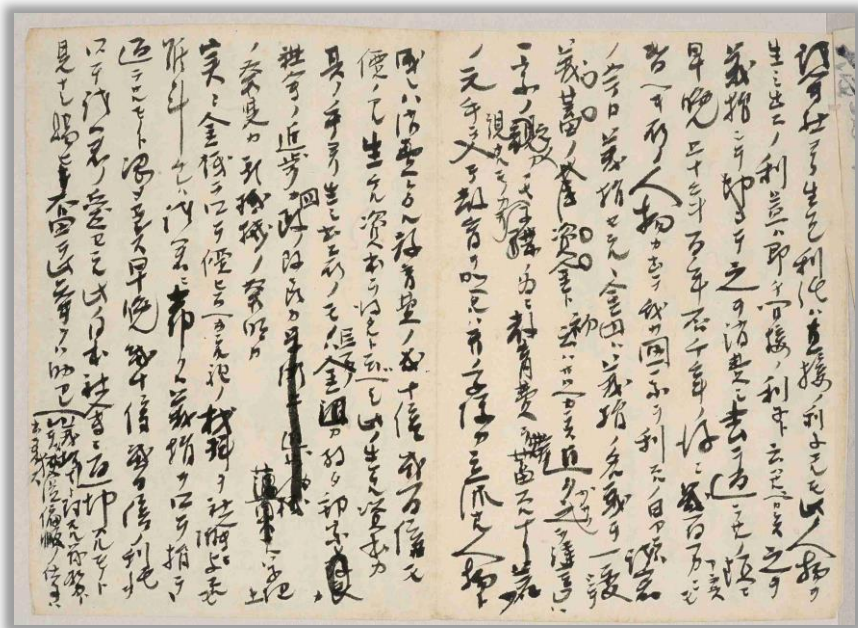
「新島襄の同志社大学設立運動」

同志社英学校開校から7年後の1882年(明治15)、新島は大学の設立を目指して募金運動を始めます。きっかけは、奈良県の土倉庄三郎からの5000円の寄付の約束を得たことでした。以来、新島は永眠するまでの約8年間この運動に従事します。ここでは、この運動の内容をうかがい知れる資料を通じて、新島が考えた同志社大学のあり方を考えます。



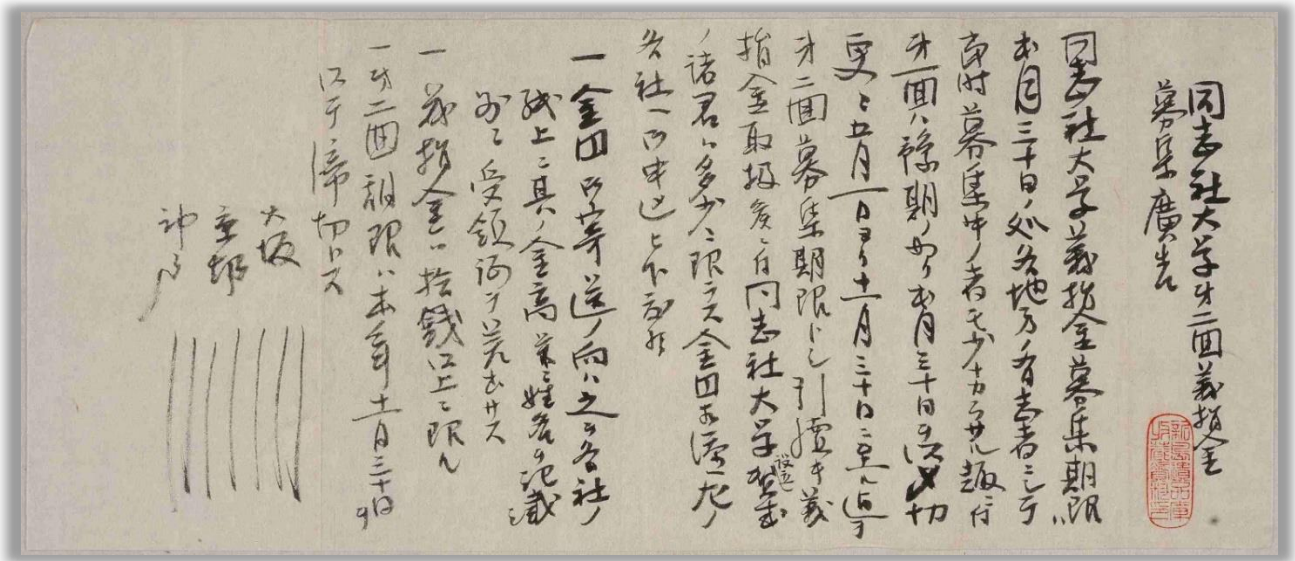
同志社大学設立之主意之骨案 (複製) 1882年 1冊 26×19cm

1882年(明治15)11月に新島が下書きした同志社大学設立を世に訴えるための文章で、現存する最も古い草稿です。新島が考えた最初の学部構想は、最初に宗教兼哲学部、医学部、法学部を優先して設け、資力が伴えば、理学部および文学部を設けるというものでした。また、大学の必要性を感じた理由は、この当時行われていた同志社の授業の内容は「學術ノ大意初歩」であり、「學術の奥蘊(原文ママ)」、すなわち専門的に学問を修める場を準備する必要性と需要を認識したことが挙げられています。



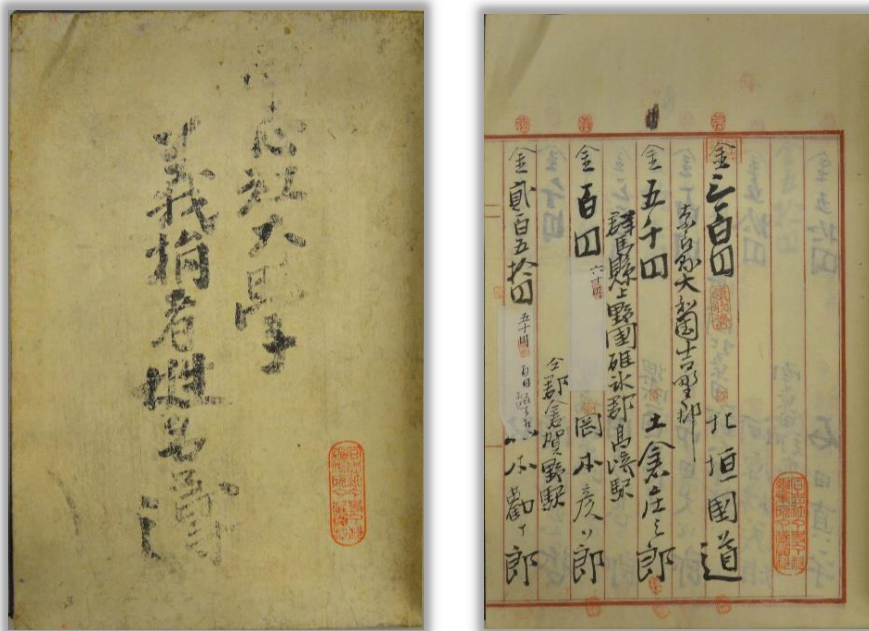
演説草稿 (複製) 年不詳 3枚 25×35cm

1889年(明治22)ごろに新島が大阪で行ったと考えられている演説の草稿です。将来大規模な経済発展が見込める大阪の人々からの募金(義捐金)を募るために、募金の意義、そして、これに対する同志社大学が果たす役割が説かれています。募金とは見返りのない行為ではなく、将来の社会発展に寄与する人物の育成に寄与し、結果、のちの間接的利益につながるとし、その人物の育成に同志社大学が貢献するとあります。



草稿「同志社大学第二回義捐金募集広告」 (複製) 1889年 1枚 16.5×40cm

第2回目の募金受付を告知するための草稿です。文面から、引き続いて受付期間を設ける必要があるほど寄付の申し出があったことが窺われます。この第1回と第2回をあわせた新聞社の協力による募金額は、約11,300円でした。



同志社大学義捐者姓名簿 (複製) 1889年 1冊 26.5×18cm

1889年(明治22)にまとめられた義捐金寄付者の名簿です。この名簿には大口から小口の寄付まで、寄付者の姓名が、匿名の希望がない限り、実名で記載されています。幅広く社会から支持を得て大学を設立しようとした意図が窺える資料です。

<同志社大学設立運動>



- 1 「同志社大学設立之主意之骨案」冒頭部分（1882年）
- 2 大口寄付者の一覧（1888年）（「同志社大学設立の旨意」所収）

大学設立運動の端緒は、新島が1882年（明治15）に奈良県の土倉庄三郎から法学部設置を条件に5000円の寄付の約束を得たときと言われます。その6年後、新島らは1888年（明治21）11月から全国の新聞雑誌に「同志社大学設立の旨意」を発表します。この発表は、1889年（明治22）の大日本帝国憲法公布、1890年（明治23）の国会開設を直前に迎えた時期でした。「旨意」ではこうした社会状況を前提として、大学教育で目指す人物像を「良心を手腕に運用するの人物」、「自治自立の人民」、「一国の精神となり、元気となり、柱石となる所の人々」、そして「一国の良心」と表現しています。これを可能ならしめるのは、これまでに同志社の各学校で実施され、世間の信頼を得てきた「徳育知育二つながら並行して、決して偏僻なる教育に陥らざる事」としています。

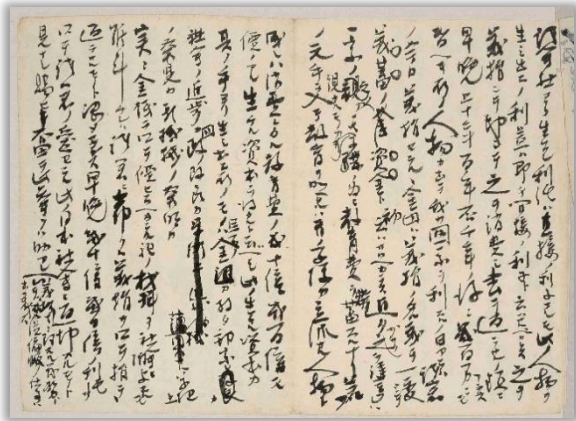
<新島襄が考えた同志社大学>



同志社大学設立之主意之骨案（1882年） 同志社大学設立の旨意（1888年）

新島は開校から7年後に同志社大学を設立するための募金運動に着手します。当時、大学と名のつく学校は東京大学のみでした。新島襄が書き残した資料には、なぜ大学が必要か、大学が国家や社会に対してどのような役割を果たすかを、アメリカやイギリスの事例を用いて説明しています。これを前提として、1882年（明治15）、新島は5学部（宗教兼哲学、医学、法学、理学、文学）を備えた大学の設立を構想しました。そして、1888年（明治21）の時点では神学、政治、経済、哲学、文学、法学などに関連した学科設置を優先と考えるようになっていきます。大学で学ぶ分野に関しては世の中の動きに合わせて変化しましたが、「基督教主義を以て、我か同志社大学徳育の基本と為す」という学生・生徒の内面に対する教育方針は不変でした。

<新島襄が伝えた寄付の意味>



演説草稿

諸会社ヨリ生スル利純ハ直接ノ利子ナルモ此人物ヲ生シ出スノ利益ハ即チ間接ノ利子ト云ハサルベカラス之ヲ義捐シテ之ヲ消費シ去テ返ラサルノ類ニアラス早晩五十年百年否千年ノ後ニ幾百万ニモ替ヘキ所ノ人物カ出テ我カ国家ヲ利スルノ日アラハ諸君ノ今日義捐セラハ、金円ハ義捐ノ名義ヲ一変シテ義蓄ノ資金ト初云ハサルヘカラス近ク少サク之ヲ譬フレハ一家ノ親ナルモノカ其子供ノ為ニ教育費ヲ貯蓄スルナリ差少ノ元手ヲ入テ教育ヲ加ヘタルハ其子供カ立派ナル人物ト成レハ消費シタル教育費ノ幾十倍幾百倍モ價ノアル生ケル資本ヲ得タルト云ベシ此ノ生ケル資本カ其ノ手ヨリ生ミ出ス所ノモノハ巨万ノ金円カ将タ邦家社会ノ進歩カ国政ノ改良カ学理上ノ発見カ新機械ノ發明カ実ニ金錢ヲ以テ價ヒスヘカラル程ノ材料ヲ社会ニ附与スルモ難斗ケレハ諸君ニ希フハ義捐ヲ以テ損テ、返ラサルモノト認ラレス早晩幾十倍幾百倍ノ利純ヲ以テ諸君ノ愛セラレ此ノ日本社会ニ返却スルモノト見ナシ賜ヒ奮テ此挙ヲハ助アレ(義捐者ニ対スル義務トシテモ狭隘偏頗ノ仕事ハ出来ヌ

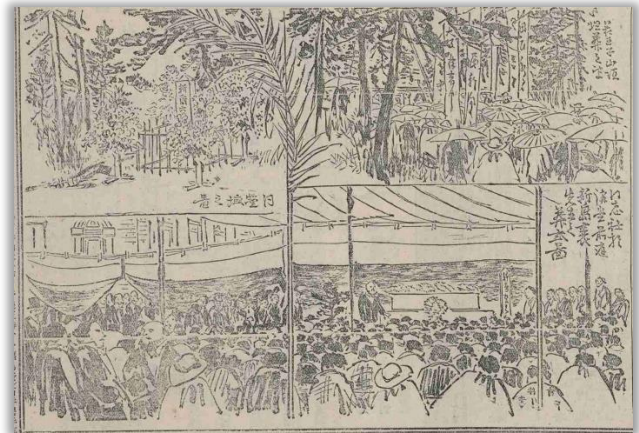
積文

明治時代に寄付という考え方が世間一般に浸透していたかは定かではありません。そのためか、新島は寄付を呼びかける際に、その寄付の意義も伝えています。新島は大阪での演説で、同志社大学設立のための寄付(義捐)として寄せられる金銭を「義蓄資本」あるいは「義蓄ノ資金」と表現しています。その理由は、高度な専門性と道徳性をもって社会の進歩に貢献し、日本国民に多大な恩恵をもたらす人物を育成する大学への金銭的投資は「間接ノ利益」であると同時に「金銭ヲ以テ価ヒスヘカラル程ノ材料」を社会に与え、結果としてこれを享受することになるとしています。無から作り上げる新しいものへの理解と期待を訴え、それに対する義務の遂行を約束する形で、新島は大学設立への協力を求めました。

<新島襄の永眠>



久保田米麿「故新島先生長逝状景画四葉」のうち臨終図



「国民新聞」第4号掲載葬儀記事挿絵(部分)

同志社の持続可能な発展のために尽力してきた新島は、1889年(明治22)11月に関東で体調を崩し、翌月より神奈川県大磯にあった百足屋で病氣療養に入りました。しかし、療養の甲斐なく、1890年(明治23)1月23日、駆けつけた妻・八重や教え子の徳富猪一郎らに見守られて永眠しました。46歳でした。同志社の運営に尽力したのは15年です。その後、新島の亡骸は京都に戻され、今出川キャンパスの同志社礼拝堂前で葬儀が行われました。4000人が参列したといわれます。そして、学生らが棺を担ぎ、若王子山頂(現在の同志社墓地)に埋葬されました。

<同志社大学の誕生>



1



2

1 専門学校令による同志社大学開校式 1912年（明治45）

2 専門学校令による同志社大学開校記念集合写真 1912年（明治45）

同志社大学がこの世に初めて誕生したのは1912年（明治45）5月、専門学校令による同志社大学が開校した時でした。この時に盛大な開校式が催されたことが写真からもうかがえます。ただし、この時の大学は文部省が規定する専門学校という位置付けであり、学校制度上最高位に位置する大学という意味ではありませんでした。大学として認められたのは、1920年（大正9）に大学令による同志社大学の開校の認可を受けた時でした。同志社大学は日本で3番目に、明治大学、法政大学、中央大学、日本大学、國學院大学の5校と共に大学設立の認可を受けました。

<同志社への期待>



同志社アーモスト館



同工館

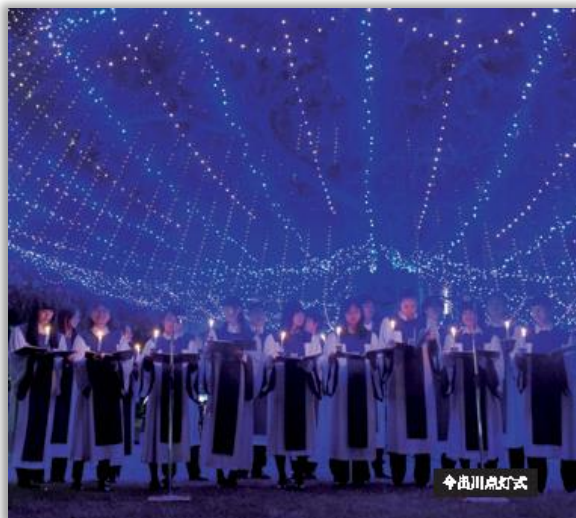
同志社に対する寄付は大学設立に限ったことではありません。例えば、アメリカの篤志家J. N. ハリスは同志社の理化学教育のために10万ドルの寄付をよせ、これを元にハリス理化学館（国指定重要文化財）が建設されました。昭和初期には、新島襄の母校であるアーモスト大学、同大学卒業生からの寄付を受け取り同志社アーモスト館（国指定登録有形文化財）が建設されました。戦後には、1944年（昭和19）に開校した同志社工業専門学校と新制大学工学部（現・理工学部）の父兄会からの寄付で工学部専用校舎同工館が建設されました。このように、同志社は創立以来多くの人々の「義蓄ノ資本」を受け取り、社会に還元するために教育・研究活動を進めてきました。

＜京田辺キャンパスのクリスマス・ツリーと

クリスマス・イルミネーション点灯式＞



クリスマス・ツリー



点灯式（今出川）



点灯式（京田辺）

京田辺キャンパスではローム記念館前に植えられたモミノキがクリスマス・ツリーの役割を担います。11月下旬から12月初旬に、毎年恒例のクリスマス・イルミネーション点灯式が両キャンパスで行われ、同志社学生聖歌隊による讃美歌が厳かな雰囲気をつくるなか、点灯の瞬間には集まった多くの学生や市民から大きな歓声が上がります。また、点灯式の参加者には廣垣俊樹理工学部教授のゼミ及び環境保全・実験実習支援センターの協力を得て、京田辺キャンパスで伐採した竹で作った同志社徽章入りの燭台を参加者にプレゼントしています。

＜同志社京田辺クリスマス燭火讃美礼拝（キリスト教文化センター主催）＞



キャンドル点灯



聖書物語劇



聖歌隊

同志社新島記念講堂で毎年12月第2土曜日に行われる同志社京田辺クリスマス燭火讃美礼拝は、地域の方々と同志社の学生や教職員が、ともに作りあげる大切な行事となっています。パイプオルガンの荘厳な音色による前奏から始まり、讃美歌合唱、開会祈祷、聖書物語劇と続きます。劇中では、京田辺市民合唱団、田辺少年少女合唱団コスモス及び同志社学生聖歌隊による合唱やハンドベル・クワイアによる演奏が行われ、その後、牧師による説教と祝福などが行われます。

<クリスマス・イブ礼拝>



クリスマス・イブ礼拝（今出川校地）



クリスマス・イブ礼拝（京田辺校地）

キリスト教文化センターではクリスマス・イブ礼拝を両校地で行っています。今出川校地では、同志社教会との共催で同志社礼拝堂において2013年から実施しています。京田辺校地では、同志社京田辺会堂が献堂された2015年に初めてのクリスマス・イブ礼拝を行いました。大学のキャンパスで迎えるクリスマスとして、学生、教職員だけではなく広く地域の方々も集って、讃美歌を歌い、聖書のことばに耳をかたむけ、イエス・キリストの降誕をともに喜び、祝っています。

資料リスト (全て複製)

資料名	作者・著編者	年代	分量(cm)	員数	所蔵先
展示テーマ「新島襄への期待」					
<i>Rutland Weekly Herald</i> , vol.80, No.2	Albert H. Tuttle	1874.10.15	60.5×45.8	1枚	同志社社史資料センター
同志社外国人教師一覧	新島襄	明治時代	28×39.3	1枚	同志社社史資料センター
自責の杖	-	明治時代	最大60	3片	同志社社史資料センター
新島襄旧蔵聖書	-	年不詳	21×14	1冊	同志社社史資料センター
同志社学院規則概覧	同志社	1888	32.7×52.3	1枚	同志社社史資料センター
横田安止宛新島襄書簡	新島襄	1889.11.23	18×169	1通	同志社社史資料センター
展示テーマ「新島襄の同志社大学設立運動」					
同志社大学設立之主意之骨案	新島襄	1882	26×19	1冊	同志社社史資料センター
演説草稿	新島襄	年不詳	25×35	3枚	同志社社史資料センター
同志社大学設立の旨意	新島襄	1888	21.5×14.8	1冊	同志社社史資料センター
同志社大学義捐金第一回報告	新島襄	1889	13.5×16	1枚	同志社社史資料センター
草稿「同志社大学第二回義捐金募集広告」	新島襄	1889	16.5×40	1枚	同志社社史資料センター
同志社大学義捐者姓名簿	-	1889	26.5×18	1冊	同志社社史資料センター

特別出陳：同志社創立 125 周年記念ポスター 58.2×45.2cm 2000 年 同志社社史資料センター所蔵

写真リスト

ポスターパネルタイトル	写真・画像	年代	所蔵先
展示テーマ「新島襄への期待」			
ラットランド演説	油彩画「ラットランド演説」 グレイス教会	1960年代 現代	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
開校当初の今出川キャンパス	今出川校地最初の専用校舎 第一寮と第二寮 薩摩藩邸跡碑	1870年代後半 現代	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
デイヴィスとラーネッド	J. D. デイヴィス D. W. ラーネッド	明治時代 明治時代	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
同志社礼拝堂	竣工当時の同志社礼拝堂 竣工当時の礼拝堂内部	1886年ごろ 1886年ごろ	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
同志社病院・京都看病婦学校	京都看病婦学校校舎 封筒(部分)京都看病婦学校絵入	1893年 明治時代	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
J. N. ハリスとハリス理化学校	竣工時のハリス理化学館 ナポレオン・サロニー作「J. N. ハリス肖像画」	1890年ごろ 1891年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
クラーク神学館	竣工当時のクラーク神学館 玄関欄間に刻まれたクラーク神学館の正式名称 Byron Stone-Clarke Memorial Hall	1893年ごろ 現代	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
同志社の精神的な基底をなすキリスト教主義	キリスト教主義と教育理念の関係を表す相関図 (キリスト教文化センター発行『基督教主義を以って徳育の基本と為せり-同志社大学とキリスト教主義-』所収)	現代	キリスト教文化センター
チャペル・アワー	京田辺校地 言館(KOTOBA-KAN)礼拝堂	現代	キリスト教文化センター
展示テーマ「新島襄の同志社大学設立運動」			
同志社大学設立運動	「同志社大学設立之主意之骨案」 大口寄付者の一覧(「同志社大学設立の旨意」所収)	1882年 1888年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
新島襄が考えた同志社大学	「同志社大学設立之主意之骨案」 「同志社大学設立の旨意」	1882年 1888年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
新島襄が伝えた寄付の意味	演説草稿	年不詳	同志社社史資料センター
新島襄の永眠	久保田米僊「故新島先生長逝状景画四葉」のうち臨終図 「国民新聞」第4号掲載葬儀記事挿絵(部分)	年不詳 1890年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
同志社大学の誕生	専門学校令による同志社大学開校式 専門学校令による同志社大学開校記念集合写真	1912年 1912年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
同志社への期待	同志社アーモスト館 同工館	1935年 1950年ごろ	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
京田辺キャンパスのクリスマス・ツリーとクリスマス・イルミネーション点灯式	クリスマス・ツリー 点灯式(今出川) 点灯式(京田辺)	現代 現代 現代	キリスト教文化センター キリスト教文化センター キリスト教文化センター
同志社京田辺クリスマス燭火讃美礼拝	キャンドル点灯 聖書物語劇 聖歌隊	現代 現代 現代	キリスト教文化センター キリスト教文化センター キリスト教文化センター
クリスマス・イブ礼拝	クリスマス・イブ礼拝(今出川校地) クリスマス・イブ礼拝(京田辺校地)	現代 現代	キリスト教文化センター キリスト教文化センター



同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第6期展

「同志社の ORIGIN—ALL DOSHISHA からのサポート—」

編集：同志社大学同志社社史資料センター

発行：同志社大学キリスト教文化センター

発行日：2017年9月15日

©Doshisha Archives Center and Center for Christian Culture